

朝鮮語の *kesita* 文: 實演提示機能を中心に *

The *kesita* construction in Korean: With a focus on demonstration marking

千田俊太郎・金善美

TIDA Syuntarô and KIM Sunmi

1 はじめに

朝鮮語には、日本語のノダ文に形式的、機能的にある程度の対応を見せる構文がある。形式的には次の (1a) のように、述語が1.) 用言連體形、2.) 形式名詞 *kes* 「もの、の」、3.) コピュラの三つからなる用言複合體であるような文である。形式名詞 *kes* は (1b) のように縮約形 *ke* 「もの、の(ん)」で現れることも多い。

(1) a. *ha-nun* *kes+i-ta* 「するのだ、するんだ」

する-PRES.ADN の +COP-DEC

b. *ha-nun* *ke+y-a* 「するのだ、するんだ」

する-PRES.ADN ん +COP-IFRM

この形式については、これまでいくつかの用法タイプの違い、その表現効果などについて、いくつかの提案がなされてきた。日韓対照研究も多い。本稿では多くの先行研究にならひ、この複雑述語形式を主たる述語とする文を *kesita* 文と呼ぶ。

本稿で使ふデータは、性質の異なるいくつかの種類のものに分かれる。第一に、漫畫調査票による調査(漫畫調査)の結果である(Tsunoda 2017)。漫畫調査票はノダに類する標識の通言語的調査のために角田三枝氏が作成した、四コマ程度のセリフ抜きの漫畫のセットである。ノダ文やそれに類する構文は、特定の文脈で使われるかどうかが問題になることが多く、単文で文法性を試しても機能が分からないことが多い。文脈を言葉で指示するのではなく、調査票を協力者に提示して聞き出し(elicitation)調査を行ひ、特定の談話文脈における容認度を確かめられるやうに作つてある。主として日本語のノダ文が發言・思考として現れやすいさまざまな文脈を設定し、30種程の短い漫畫のストーリーがセットにしてあり、ストーリー番號、コマ番號、セリフ番號が付けてある。詳しくはTsunoda (2017)を参照されたい。この調査によるデータのほか、作例、先行研究で使われた例文などを適宜使つてゐる。

實は漫畫調査の際、ある文脈になぜか落ち着かなかつたり、對應する日本語表現と奇妙

* 本論文の一部は JSPS 科研費 JP21320082, JP25284078, JP16H03416, JP17H02333 の成果の一部である。角田三枝氏主催の共同研究(2013-2015年度、AA研共同利用・共同研究課題「日本語のノダに類する文末表現標識の通言語的研究: 思考プロセスの観点からのアプローチ」)での漫畫調査票による調査、發表と討論に負ふところが多い。ここに記して謝意を表します。

なニュアンスのずれがあつたりすることがあつた。主にそのことを説明するために我々が至つた暫定的な結論は、*kesita* 文の性質の種類に大略次のものを認めるべきだといふことになる。

- (2) a. 本用言に接尾辭-*l*がついた將然連體形^{*1}を取るもの
 b. 本用言が將然でない連體形 (-*n*, -*nun*, -*ten*) を取るもの
1. 説明
 2. 當爲
 3. 眼前提示 (ある種の實演)

本稿では形式の特徴から將然連體形を *l* 連體形と呼び、本用言が *l* 連體形を取つてゐる *kesita* 文を -*l kesita* 文と呼ぶ。これに對し、將然でない連體形は付加される接尾辭の末尾が *n* なので *n* 系連體形と一括して呼び、本用言に *n* 系連體形が現れる *kesita* 文を -*n kesita* 文と呼ぶ。

§2 で *kesita* 文の研究史を簡単にまとめる。この中で -*l kesita* 文の特徴に觸れるが、§3 以降では -*n kesita* 文を主に扱ふ。§3 では説明 (關係づけ) 用法について、理由・原因の *kesita* 文や敘述様式説明型の *kesita* 文が自然な表現を作るのに對し、その他の場合では *kesita* 文が判断を表す時にのみ自然になることを見る。次に説明 (關係づけ) を表すとは言へない用例として §4 で當爲用法、§5 で眼前提示用法を論じる。眼前提示用法については從來指摘のなかつた歴史的現在や回想證據文との共通点を指摘する。最後に §6 で眼前提示用法が實演の性質をもつことを示す。§7 は残る問題を含むまとめである。

2 *kesita* 文の研究史

本用言が *l* 連體形を取る -*l kesita* 文が、複雑述語の構成要素となる文法的まとまりと認められるやうになつたのはソ=ジョンズ (1978) に始まる。*l* 連體形が形式名詞 *kes* を修飾してコピュラ補語となつてゐる (3a) では *i sakwa* 「この林檎」といふコピュラ主語と *mekul kes* 「食べるもの」といふコピュラ補語が通常のコピュラ文を構成し、*kes* を *mwulken* 「物」に置き換へることができるのに對し、(3b) のやうな -*l kesita* 文は *ku-i* 「その人」と *i sakwalul mekul kes* 「この林檎を食べるはず」がコピュラ文の構成素として認められず、-*l kes* が一つのまとまりとして「推定」といふ敘法的意味を現はしてゐるといふのである。

- (3) a. [*i sakwa*]-*nun* [*nay-ka mek-ul kes*]+*i-ta*
 この 林檎-TOP 私-NOM 食べる-PROSP.ADN の-COP+DEC
 「この林檎は私が食べるものだ。」 (ソ=ジョンズ 1978: 例文 (9))
- b. *ku-i-ka i sakwa-lul mek-ul kes+i-ta*
 その-人-NOM この 林檎-ACC 食べる-PROSP.ADN の +COP-DEC
 「その人がこの林檎を食べるはずだ/だらう。」 (ソ=ジョンズ 1978: 例文 (13))

*1 將然は prospective の譯語として使ふ。將然連體形は未來連體形とも呼ばれる。

-*l kesita* 文の機能と -*n kesita* 文の機能とが大きく異なることは、-*l kesita* 文が -*n kesita* 文と切り離されて論じられ始められた研究史にも反映してゐる。-*l kesita* 文は大まかには「推量、意志」を表す*2。-*l kesita* 文と同様に「推量、意志」を表すと言へる用言接尾辭に -*keyss* といふもう一つの形式がある。-*l kesita* 文研究においては -*keyss* との違いが主に論じられてきた (cf. ソ=ジョンズ 1978; 野間 1990; キム=ソンミ他 2008; 金善美 2016)。

-*l kesita* 文と -*n kesita* 文には次のやうな違いがある。-*n kesita* 文はコピュラ部を否定することができるが (4)、-*l kesita* 文はコピュラ部の否定が自然ではなく (5)、付加疑問用法の場合にのみ限定的に可能である (6)。

- (4) a. *sewul-eyse o-n ke+y-a* 「ソウルから來たんだ」
 ソウル-ABL 來-PST.ADN の +COP-IFRM
 b. *sewul-eyse o-n ke-n ani-ya* 「ソウルから來たんぢやない」
 ソウル-ABL 來-PST.ADN の-TOP NEG.COP-IFRM
- (5) a. *sewul-eyse o-l ke+y-a* 「ソウルから來る (豫定だ)」
 ソウル-ABL 來-PROSP.ADN の +COP-IFRM
 b. *?sewul-eyse o-l ke-n ani-ya* (ソウルから來るんぢやない)
 ソウル-ABL 來-PROSP.ADN の-TOP NEG.COP-IFRM
- (6) *sewul-eyse o-l ke ani-ya?* 「ソウルから來るはずぢやないか」
 ソウル-ABL 來-PROSP.ADN の NEG.COP-IFRM
 cf. *sewul-eyse o-l ke+canh-a?* 「ソウルから來るはずぢやないか」
 ソウル-ABL 來-PROSP.ADN の +COP.NEG-ifrm
 (付加疑問)

また、推量の -*l kesita* 文 (7a) と -*n kesita* 文 (7b) ではコピュラの取れる時制・相が異なる (カン=ソヨン 2004)。

- (7) a. *ama ney moks-to chayngki-l swu iss-ul*
 たぶん お前.GEN 分-も 取揃-PROSP.ADN 可能性 存-PROSP.ADN
 (*ke+y-a*, *?ke+y-ess-e*, *?ke+te-la*).
 の +COP-IFRM の +COP-PST-IFRM の +COP.RETRO-DEC
 「たぶんお前の分もつかめるだらう、?だろだつた、?だろだつたな」
- b. *kunyang apeci-ka al-a-se ha-si-n*
 ただ 父親-NOM 知-INF-EMPH する-HON-PST.ADN
 (*ke+y-a*, *ke+y-ess-e*, *ke+te-la*).
 の +COP-IFRM の +COP-PST-IFRM の +COP.RETRO-DEC
 「ただ父さんが自分のやりたいやうにしたんだよ、したんだつた、したんだつた」

*2 ソ=ジョンズ (1978) は *l* 連體形の基本意味として〈未然〉を認め、そこから派生した -*l kesita* 文は〈推定〉と〈意圖〉を表すとした。ソ=ジョンズ (1978) が擧げた *l* 連體形の派生意味にはその他〈指令〉と〈説明〉があるが、どちらの用法もコピュラが後續することが形式的に求められないため、ここでは *kesita* 文の一種と考へないことにする。

なあ (回想)」

以上カン=ソヨン (2004: 99) より

-n kesita 文は Bak (1983) が「主語無し構文」の一種としてリストしたのがまとまつた形式として取り上げられた初めのものではないかと考へる。Bak (1983) のいふ「主語無し構文」とは、形式名詞に先行する部分が全て連體修飾部だと考へると、連體修飾部と形式名詞がコピュラや形容詞などの述語の唯一の補部となつてしまひ、主語が無いといふ解釋が可能な構文のことである。

(8) a. Chelswu-ka cwuk-un kes kath-ta. 「チョルスが死んだやうだ。」

チョルス-NOM 死ぬ-PST.ADN の 同様-DEC

b. [[∅]] [[[[Chelswu-ka cwuk-ess-ta] [kes]] [kwa]]] [kath-ta]] *³

S NP NP VP PP NP S Comp P PP V VP

上の主語無し解釋をとるかどうかは別として、-l kesita 文について指摘されてきたことと同様、-n kesita 文も通常のコピュラ文の構造と異なることは明らかである*⁴。その後、韓国における日本語研究や日韓對照研究で「のだ」對應表現として取り上げられるやうになり (cf. 安増煥 1992; 宋承姫 1993)、ついで韓國內外の研究者が kesita を一つの文末形式として扱ふやうになつたもののやうである (シン=ソングヨン 1993; キム=オンジュ 1996; パク=ソヨン 2001; 丁仁京 2008; パク=ナリ 2012; チョン=サン Chol 2016)。2000 年代に入つてからは、kesita を対象にした日韓對照研究はさかんに行はれてゐる (李南姫 2004; 崔真姫 2005; 印省熙 2006; 金廷珉 2007; キム=ジョンミン 2012; 清水 2012, 2015)。

ほとんどの日韓對照研究が共通して指摘してゐることに、朝鮮語の kesita 文が日本語のノダ文に比べて使用頻度が低いこと、従つて朝鮮語の kesita 文が日本語のノダ文よりいはば狭い意味をもつと考へられること、がある。その原因については、日本語が朝鮮語に比べ名詞述語文が発達してゐる (安増煥 1992: 109) など言語の全般的な表現方式についての傾向を擧げるもの、ノダ文と kesita 文は小説の會話文より地の文でよく對應する (印省熙 2006)、ノダ文が感情的な有標性に關わりなく用ゐられるのに對し kesita 文は會話文で感情的な文や強く意見を主張する場合に使はれる (印省熙 2006) など出現環境の特徴について考察するもの、「のだ」に比べ kesita 文は文法化が進んでゐない (崔真姫 2005: 58) など通時的な觀點からの指摘があるが、kesita 文とノダ文の意味・機能の違いに明確な形で言及してゐるものは少ない。

そのやうな中、清水 (2012) は、朝鮮語の kesita 文が「狀況 P と関連づけて言い表す文ではない。」「名詞化によって他を排除し、結末を主張する文である。」(p.95) とし、(清水

*³ ここでは cwuk-un (死ぬ-PST.ADN) を cwuk-ess-ta kes kwa (死ぬ-PST-DEC のと) と分析してゐる。Comp のあとの閉ち括弧に NP のラベルがないのは原文ママ (p.15, 例文 34)。

*⁴ このやうな構造は、日本語では文末名詞文 (新屋 1989)、體言締め文 (角田 1996) などと呼ばれてきた。最近では他の言語に見られる同様の構文を含めて人魚構文 (角田 2011; Kim 2013) といふ名稱が提案されてゐる。韓国ではこのやうな一連の形式について、名詞の文法化現象の側面が論じられることが多いやうである (cf. アン=ジュホ 1997; カン=ソヨン 2004)。ところで、朝鮮語の kesita 文研究では通常のコピュラ文がデータに混ざり込んでゐることがままある。例へば宋承姫 (1993) の (20)、(23)、パク=ソヨン (2001) の (7)、清水 (2015) の (44) などは通常のコピュラ文であり「主語無し」の kesita 文ではないと思はれる。

2015) では *kesita* 文は「書き換えの機能」が働く場合に使用でき、「書き換えの機能」が働いていない場合は使用できないとしてゐる。これが *kesita* 文の基本機能による原理的な説明の試みとして重要なものと考へられるので、次節以降では主に清水 (2012, 2015) と我々の把握の違いには特に注意してみてゆくことにする。

3 説明用法

日本語には先行文脈との結び付きの観点から説明されるノダ文がある。例へば田野村 (2002: 5) は「のだ」の基本的な意味・機能として「あることがら α を受けて、 α とはこういうことだ、 α の内實はこういうことだ、 α の背後にある事情はこういうことだ、といった気持ちで命題 β を提出する」とし、これをノダ文の基本的な機能と考へてゐる。「のだ」が二つのことがらを意味的につなげる機能を果たすものと見るものである*5。ただし、 α は「必ずしもことばの形では表現されない」(p.6)*6。朝鮮語の *kesita* 文にも非常に類似した用法がある。この観点からの先行研究においては、パク＝ソヨン (2001) が「理由、要約、敷衍、結果」の例を擧げて *kesita* 文が凝結性の装置だとしてをり、チョン＝サン Chol (2016) も奥田 (1990) を受けて二つの文章間のテキスト結束性の問題を「説明の構造」として考察してゐる。例へば (9a) は「理由」、(9b) は「原因説明文」の例として擧げられてゐる。

- (9) a. *ai-tul-un selo-uy mom-ey sonthopcakwuk-ul nay-ko kancilem-ul*
 子供-PL-TOP 互ひ-GEN 體-LOC 爪痕-ACC 出す-and くすぐつたさ-ACC
thaywu-mye khilkhilkely-ess-ta. kule-n ai-tul-i
 感じさせる-and くすくす笑ふ-PST-DEC そんなだ-PRES.ADN 子供-PL-NOM
kapcaki coyonghay-cy-ess-ta. ney-ka nathana-ss-ten kes+i-ta.
 急に 静かだ-INF-INCH-PST-DEC お前-NOM 現れる-PST-RETRO.ADN の +COP-DEC
 「子供たちは互ひの體に爪痕をつけてくすぐり、くすくす笑つた。そんな子供たちが急に静かになつた。お前が現れたのだ。」

〈Chessalang:207〉 (パク＝ソヨン 2001: 138)

- b. *pakk-eyse mwun-ul yetat-nun soli-ka tully-e w-ass-ta.*
 外-ABL 戸-ACC 開閉する-PRES.ADN 音-NOM 聞こえる-INF 来る-PST-DEC
swunpem-eun tasi kincanghay-ss-una pakk-un kot camcamhay-cy-ess-ta.
 [人名]-TOP 再び 緊張する-PST-ADVRS 外-TOP すぐ 静かだ-INF-INCH-PST-DEC
oychwul-eyse tolao-n thwuswukkayk+i-n tushay-ss-ta.
 外出-ABL 歸つて来る-PST.ADN 投宿客 +COP-PRES.ADN やうだ-PST-DEC
elmana sikan-i hull-ess-ulkka? theyipul-eyse cam-i
 どれだけ 時間-NOM 流れる-PST-PROSP.FAM.Q テーブル-LOC 眠り-NOM

*5 野田 (1997) のいふ「関係づけ」のノダ文にあたるが、野田 (1997) は「関係づけ」と「非関係づけ」の「どちらか一方を基本的な型とみなして、もう一方をそれから派生したものと位置づけることはしない」(p.73)。

*6 奥田 (1990) は、「述語に「のだ」をともなう文が《説明》としてはたらくとすれば、説明をうける対象としての物あるいは出来事が、まゑもって先行する文のなかにさしだされていなければならない。」とし、言語形式同士の関係を主に観察してゐる。

tul-ess-ten swunpem-eun humcis nolla cam-i kkay-ss-ta.
 入る-PST-RETRO.ADN [人名]-PST-DEC びっくりと驚く-INF 眠り-NOM 覚める-PST-DEC
tto pakk-eyse mwun-ul yetat-nun soli-ka tully-e w-ass-ten
 また外-ABL 戸-ACC 開閉する-PRES.ADN 音-NOM 聞こえる-INF 来る-PST-RETRO.ADN
kes+i-ta.
 の +COP-DEC

「外から戸を開け閉めする音が聞こえてきた。スンボムは再び緊張したが外はすぐ静かになった。外出から歸つて来た投宿客のやうだつた。どれほど時間が流れたらうか。テーブルで寝入つたスンボムはびっくりとして目が覺めた。また外から戸を開け閉めする音が聞こえてきたのだ。」

〈Mwukwunghwa2, 113〉 (チョン=サン Chol 2016: 246)

以上のやうに、先行文脈の理由や原因を提示する際に *kesita* 文が現れるのは日本語のノダ文によく似てゐる。

日本語のノダ文には、「ある事態の存在は認めた」上で、その事態がどのやうに捉へられるかを表す「敘述様式説明型」(益岡 2007: 86–87) と言はれる用法があり、ある種の想定を訂正するために使はれることも知られてゐる。朝鮮語でも二つの命題が對照的に提示されるところに *kesita* 文が現れることが多く、*kesita* 文は「敘述様式説明型」の用法をもつと言つてよい。例へば次のやうなものである。

- (10) a. *a... ssi... na kuke hwumchi-n ke any-a. chac-a cwu-n*
 ああくそ俺 それ盗む-PST.ADN ん NEG.COP-ifrm 見つける-INF やる-PST.ADN
ke+y-a.
 ん +COP-IFRM

- b. ちえ、俺は盗んでねえよ。取り返してやったんだ。

〈『オール・イン』 p.34〉 (清水 2015: 32)

「敘述様式説明型」の別の例に次のやうなものがある。

- (11) 山田さんが見るからに嬉しさうな様子。「結婚が決まつたらしいわよ」と噂を聞いて:

- a. *kuleh-kwuna. kulayse celeh-key kipwun-i coh-un ke-kwuna.*
 そのやうだ-EXCL それで あのやうだ-ADV 気分-NOM 良-PRES.ADN の-COP.FIN.EXCL
 「さうか。それであんなに気分が良いのか」*7
- b. **kuleh-kwuna. kulayse celeh-key kipwun-i coh-kwuna.*
 そのやうだ-EXCL それで あのやうだ-ADV 気分-NOM 良-FIN.EXCL
 (さうか。それであんなに気分が良いか)

漫畫調査票 017-40a-20a

*7 この例文において、*kesita* 文が納得を表してゐないことを付言しておきたい。朝鮮語は納得したときの感嘆の語尾 *-kwuna* があり、この例の一文目は非 *kesita* 文による納得感嘆になつてゐる。二文目は *kesita* 文による納得感嘆だが、納得を表してゐるのはやはり語尾である。

(11a) は因果關係自體に焦點があたつてをり、次のやうな言ひ換へが可能である。

- (12) *kuleh-kwuna. celeh-key kipwun-i coh-un ke-n kulayse-kwuna*
そのやうだ-EXCL あのやうだ-ADV 気分-NOM 良-PRES.ADN の-TOP それで-COP.FIN.EXCL
「さうか。あんなに気分が良いのはそれでか」

パク＝ソヨン (2001) は結果の *kesita* 文としてをり、印省熙 (2006) や清水 (2012) では同様の例を因果關係の *kesita* 文としてゐるが、そのやうな特殊な用法は認める必要がなささうである。

ところで、朝鮮語の *kesita* 文でも、先行文脈が言語形式として現れてゐる必要はない。例へば (13) の心内發話は、關連づけられることからは「ある女性が豫定があるかどうか聞いてきた。」といふやうなことになるが、先行文脈には「日曜日に豫定がありますか」といふ女性の發言しかない*8。

- (13) (女性に日曜日に豫定があるかどうか聞かれて心の中で)
teyithuha-ca=ko kule-nun ke+nka?
デートする-HORT=QUOT さう言ふ-PRES.ADN の +COP.FAM.Q
「デートしようと言ふのかな」 漫畫調査票 023-20a-20a

次の例も先行文脈は言語的なものではなく、狀況全體と言ふしかない。

- (14) 友達が人にぶつかられたあと「財布がない」と言ふ。その友達に對して:
a. *e! cengmal? akka ku salam-i kacyeke-n ke+y-a.*
え 本當 さつき その 人-NOM 持つて行く-PST.ADN の +COP-IFRM
「え! 本當? さつきのあの人が持つて行つたんだ」
b. *#e! cengmal? akka ku salam-i kacyekass-e.*
え 本當 さつき その 人-NOM 持つて行く .PST-IFRM
(え! 本當? さつきのあの人が持つて行つた)*9
漫畫調査票 026-40a-10a

以上の例からは、日本語のノダ文と朝鮮語の *kesita* 文がよく似た領域で使はれてゐることが分かる。しかし、日本語でノダ文が使はれる狀況で、朝鮮語で *kesita* 文が對應しない

*8 なほ、次の i. に示すやうに、上の例において *kesita* 文の形式を取ることは義務的ではなく、また同様の意味を表す他の表現 ii. もある。

- i. *teyithuha-ca=ko kule-na?*
デートする-HORT=QUOT さう言ふ-FAM.Q
「デートしようと言つてる?」
ii. *teyithuha-ca=nun mal+i-nka?*
デートする-HORT=QUOT.HS.PRES.ADN 言葉 +COP-FAM.Q
「デートしようといふことか」

*9 文脈にそぐはない例文に記號「#」を添へる。*kesita* 文はほとんどの場合で形態的には容認される形を作るため、本稿では「*」を付した例文も非文ではなく前後文脈に合はせて判斷すると「著しく容認度が低い」とすべきものが多い。

ことが多いこともよく指摘されてゐる。*kesita* 文の機能に對して「説明」など日本語と同様のラベル付けをするだけでは、朝鮮語の *kesita* 文が日本語のノダ文に比べて使用頻度が低いこと、従つて朝鮮語の *kesita* 文が日本語のノダ文よりいはば「狭い意味」をもつと考へられることが説明できない。例へば、次のやうな例が問題になる。

(15) 仲の良い姿を目の前にして

a. *nehuy-tul-un cham sai-ka coh-kwuna.*

汝等-PL-TOP 實に 仲-NOM 良-FIN.EXCL

「お前たちは實に仲が良いね」

b. #*nehuy-tul-un cham sai-ka coh-un ke+kwuna.*

汝等-PL-TOP 實に 仲-NOM 良-PRES.ADN の +COP.FIN.EXCL

(お前たちは實に仲が良いのだね)

漫畫調査票 003-20a-10a

目の前で確認できる事實については *kesita* 文を使ふことができない。ただし似た状況でも (16) のやうに「～から判断するに」のやうな意味關係の從屬節を前置すれば *kesita* 文を使ふことができる。

(16) *enceyna selo towacwu-nun ke-l po-myen nehuy-tul-un cham sai-ka*

いつも 互ひに 助-PRES.ADN の-ACC 見-COND 汝等-PL-TOP 實に 仲-NOM
coh-un ke-kwuna.

良-PRES.ADN の-COP.FIN.EXCL

「いつも互ひに助け合つてゐるのを見るに、お前たちは實に仲が良いのだね」

以上に見られるやうに、朝鮮語の *kesita* 文は目の前の事實を描寫する目的で使はれず、新たな判断を下す際に使はれやすい。そのことを示す例をもう一つ擧げる。次の三つの状況を考へてみよう。

(17) A a. あら、何か音がする。

b. なんだろう。こんな夜ふけに。

c. あっ、雨が降って(い)るんだ。

漫畫調査票 004a.20b.10b

B a. あら、何か音がする。

b. 何だろう? こんな夜ふけに。誰か来たのかしら? まさかどろぼう??

c. あっ、雨が降って(い)るんだ。

漫畫調査票 004b.20b.10b

C a. あら、何か音がする。

b. 何だろう? こんな夜ふけに。雨かしら? 風かしら…?

c. あっ、雨が降って(い)るんだ。

漫畫調査票 004c.20b.10b

上のやうな三通りのストーリーの最終のせりふ (17A/B/C の c) における *kesita* 文の容認性は、次に示す通りである。

- (18) a. *a, pi-ka o-ney.*
 あ 雨-NOM 来-FAM.DEC
 「あ、雨が降つてゐる」(A、B、C 全て OK)
- b. *a, pi-ka o-nun ke+ney.*
 あ 雨-NOM 来-PRES.ADN の +COP.FAM.DEC
 「あ、雨が降つてゐるんだ」(A では容認度がとても落ちるが、B は OK、C は若干不自然)
- c. *a, pi-ka o-nun ke+y-ess-ney.*
 あ 雨-NOM 来-PRES.ADN の +COP-PST-FAM.DEC
 「あ、雨が降つてゐるんだつた」(A では容認度がとても落ちるが、B はこの表現が最も自然、C も OK)

(18a) は非 *kesita* 文で、三つの状況全てで容認される。(18b) は *kesita* 文で「どろぼう」の可能性を覆す形で判断がなされる B の状況でのみ使へる。(18c) は *kesita* 文の過去形で、B や C の状況で使へる。

次の例では「頭が痛い」ことから「風邪をひいた」と判断できるといふ、後者が *kesita* 文で現はれてゐる。

- (19) *meli-ka aph-a=yo. kamki-ey kelli-n ke+ey=yo*
 頭-NOM 痛い-INF=POL 風邪-LOC かかる-PST.ADN かかる +COP.IFRM=POL
 「頭が痛いです。風邪をひいたのです。」

(崔真姫 2005)

以上のやうに、先行文脈に明示された事態の理由・原因を表す *kesita* 文や對比される事態が明らかな叙述様式説明型の *kesita* 文のほか、「状況 α は β を意味する」、「状況 α から β と判断できる」のやうな、判断文 (cf. 田中 1979) の意味で *kesita* 文が使はれる。角田 (2004) は日本語のノダ文は「思考プロセス」に沿つて現れるとし、思考のプロセスの「疑問」として現れる内容に注目した場合、サイクル 1「現実事態を把握するタイプ」、サイクル 2「現実事態、言語内容に関し、「このことがいったい何を意味するか」、「なぜこのような事態になったか」といった疑問に基づいて答えを求めるタイプ」、サイクル 3「言語内容について「なぜこのようなことを言うか」という疑問から答えを求めるタイプ」に分けることができるといふ。この分類に基づくと、*kesita* 文で現れる判断文はサイクル 2/3 のレベルの問いに對應するものだと言へる。

清水 (2012) では、日本語のノダ文と朝鮮語の *kesita* 文の違いを「日本語の「のだ」文が状況 P と関連づけて言い表す文であるのに対して、韓国語の *kesita* 文は、状況 P と関連づけて言い表す文ではない」、「*kesita* 文は、名詞化によって他を排除し、結末を主張する文である」と説明しようとしてゐる。ここで「他を排除し、結末を主張する」といふのはおそらく対比的といふことのやうであるが、本節で上に挙げてきた「理由・原因」の *kesita* 文の例 (9a, 9b) や、「判断」の *kesita* 文の例 (13, 14) は必ずしも対比的ではないし、また、むしろ、先行文脈との関連づけを行なつてゐるやうに見える。

さらに、(20)の例は他の状況との関連づけを行なはずに實情を吐露するノダ文として知られてゐる用法であり (cf. 田野村 2002; 益岡 2007)、このような場合に朝鮮語の *kesita* 文は現はれない。宋承姫 (1993) が早くに指摘し^{*10}、清水 (2012: 76) も認める通り、朝鮮語の *kesita* 文は「實情」を表す用法がないのである。

(20) a. 私、實は、以前から金さんのことを知っているんです。

b. **ce, sil-un icen-pwuthe kim ssi-lul al-ko iss-nun ke+y-ey=yo*
私 實-TOP 以前-since [人名] さん-ACC 知る-and ゐる-PRES.ADN ん +COP-IFRM=POL
(清水 2012: 64)

朝鮮語の *kesita* 文に實情用法がないことは、関連づけがなされないからこそこのことであるやうにも見える。さうすると、清水 (2012) の主張が、このような場合に *kesita* 文が現はれないことをうまく説明できるのか、疑問である。

清水 (2015) では *kesita* 文は「相手のもっている誤った情報を書き換える際に使用される」とし、(20)と同様の例について、「相手の誤解に對して齟齬のある部分の情報を書き換えようとしているのではない」ことが *kesita* 文使用を制限してゐると考へてゐる。このことは、本節で見えてきた「判断」の *kesita* 文や「敘述様式説明型」の *kesita* 文にはある程度當て嵌まる。特に個別の例を見ると、「雨が降つてゐるんだ」の例 (18) の状況別の容認度などは基本的に清水 (2015) の説明に沿つてゐる。しかし、説明・理由の *kesita* 文にはそのまま適用できる説明ではないし、次の節から示す當爲や眼前提示の *kesita* 文にも當て嵌まらない。さらに、相手のもつてゐる誤った情報を書き換へる際に必ず *kesita* 文が現れるわけではないことから、*kesita* 文の唯一の使用原理と考へることはできない。次の例を見てみよう。

(21) (*ni-ka mek-ess-ci*. 「お前が食べたんだらう」に對して)

a. *na an mek-ess-e.*

俺 NEG 食べる PST-IFRM

「俺は食べてゐない。」

b. *nay-ka mek-un ke ani-ya. (kyay-ka mek-un*

私-NOM 食べる-PST.ADN ん NEG.COP-IFRM あのこ-NOM 食べる-PST.ADN

ke+y-a.)

ん +COP-IFRM

「俺が食べたんぢやない (あのこが食べたんだ)。」

このやうに、相手の想定に反駁する文脈で非 *kesita* 文の (21a) も使へるし、敘述様式説明型の *kesita* 文である (21b) も使へる。

この節では (主に) 先行文脈との関連づけを行なふ *kesita* 文の用法に 1. 「理由、原因」 2. 「敘述様式説明型」 3. 「判断」の少なくとも三種類があること、*kesita* 文には先行文脈との関連づけを行なはない「實情」の用法がないことを確認した。

*10 宋承姫 (1993) は田野村 (2002) を受けて「披瀝性」がないとしてゐる。

4 當爲用法

朝鮮語の *kesita* 文には、日本語の「(する)ものだ」に相当するやうな〈道理〉や〈義務〉を表はす用法がある。當爲用法においては、本用言の連體形は必ず現在である。(22a) がそのやうな *kesita* 文の例であり、〈道理〉表現 (22b) と置き換へが可能であるが、命令表現 (22c) とはニュアンスが異なる。

- (22) a. *nam=hanthey pwuthak-ul pat-un ke-n ppalli chelihay cwu-nun*
 他人=DAT お願い-ACC 受-PST.ADN の-TOP はやく 處理する.INF 與-PRES.ADN
ke+y-a.
 の +COP-IFRM
 「ひとにお願いされたことははやく處理してやるものだ」
- b. *nam=hanthey pwuthak-ul pat-un ke-n ppalli chelihay cwu-nun*
 他人=DAT お願い-ACC 受-PST.ADN の-TOP はやく 處理する.INF 與-PRES.ADN
pep+i-ya.
 道理 +COP-IFRM
 「ひとにお願いされたことははやく處理してやるべきだ」
- c. *nam=hanthey pwuthak-ul pat-un ke-n com ppalli chelihay*
 他人=DAT お願い-ACC 受-PST.ADN の-TOP ちよつと はやく 處理する.INF
cw-e.
 與-IFRM
 「ひとにお願いされたことははやく處理してやれ」

漫畫調査票 016-30b-20b

清水 (2012) は「今ここでする行動を表し」「命令」するやうな場合に日本語ではノダ文が使はれることがあるのに対し朝鮮語では *kesita* 文が使はれないとし、社會的通念として一般的にさうするもの、さうすべきものとして表現する場合に *kesita* 文が使はれるとしてゐる。この觀察についてはほとんど同意できる*11。

ただし、否定の〈道理〉の *kesita* 文も可能である。この場合、例へば (23a) などは禁止=否定命令 (23b) と表現効果があまり變はらないやうであり、肯定の〈道理〉*kesita* 文と意味的にずれがある可能性がある。

- (23) a. *mosss-e. telewu-n ke mek-nun ke ani-ya.*
 駄目-IFRM 汚-PRES.ADN の 食-PRES.ADN の NEG.COP-IFRM
 「だめだ。汚いもの食べるんぢやない」
- b. *mosss-e. telewu-n ke mek-ci ma.*
 駄目-IFRM 汚-PRES.ADN の 食-CONN NEG.IFRM
 「だめだ。汚いもの食べるな」

漫畫調査票 019-40a-10a

*11 チョン=サンチョル (2016) も日韓のノダ文/*kesita* 文の違いが「行け! 行くんだ」のやうな用法にある可能性に言及してゐる。

翻譯資料を用いた日韓對照研究において、「命令」に近い表現においてノダ文と *kesita* 文の對應がずれることについてはたびたび指摘されてきた (印省熙 2006; 金廷珉 2007; 清水 2012)。日本語で「のだ」が當爲を表す時、基本的には現場における聞き手へのはたらきかけが表はされる。朝鮮語の *-n kesita* 文の表す當爲ははたらきかけを含意せず、より一般的な當爲を表す點で日本語の「ものだ」文に近い。

日本語の「ものだ」文に觀察される特徴ほどの程度 *kesita* 文には當て嵌まるだらうか。(24a, b) は日本語の當爲の「ものだ」文について指摘されてゐるやうに、總稱的な主語をもち、二人稱主語にすると不自然である。

(24) a. 子供は大人の言うことを聞くものだ。(高梨 2006)

b. *ai-tul-un elun-tul-i ha-nun mal-ul cal tut-nun*
 子供-PL-TOP 大人-PL-NOM 言ふ-PRES.ADN 言葉-ACC よく聞く-PRES.ADN
ke+y-a
 の +COP-IFRM
 「子供は大人の言うことをよく聞くものだ。」

日本語の「ものだ」文は本性、性質を表す場合があるが、朝鮮語の *kesita* 文 (25b)、(26b) は純粹な性質の述べたてといふよりは、當爲として解釋するか、あるいは聞き手を教へ諭すやうなニュアンスが加はらないとをかしな文になる*12。

(25) a. 子供は大人の言うことを聞かないものだ。(高梨 2006)

b. *#ai-tul-ilan elun-tul-i ha-nun mal-ul cal an tut-nun*
 子供-PL-TOP 大人-PL-NOM 言ふ-PRES.ADN 言葉-ACC よく NEG 聞く-PRES.ADN
ke+y-a
 の +COP-IFRM
 「子供とは大人の言うことを聞かないものだ(ぞ)。」

(26) a. 子供は大人の言つたことを忘れるものだ。(高梨 2010: 112)

b. *#ai-tul-ilan elun-tul-i ha-n mal-ul ic-e peli-nun*
 子供-PL-TOP 大人-PL-NOM 言ふ-PST.ADN 言葉-ACC 忘れる-INF しまふ-PRES.ADN
ke+y-a
 の +COP-IFRM
 (子供とは大人の言つたことを忘れるもの/べきだ(ぞ)。)

(24b) の主語の助詞を (27) のやうに *-ilan* 「～とは」にすると日本語の本性・性質を表す用法に近くなるが、やはりそのことを知らない人を教へ諭すニュアンスがある點で同じものとは言へない。

(27) a. 子供とは大人の言うことを聞くものだ。

*12 丁仁京 (2008) は *kesita* の關聯形式として *keyta* を挙げ、*kesita* 文の「斷定的な表現」に對して *keyta* が「柔らかな斷定」であり、文脈によつて教へ諭しの場面で使はれることに言及してゐる。本稿では *keyta* は *kesita* が異なるスタイルで現はれたものと考へる。實際、教へ諭しのニュアンスは *kesita* 文でも充分に出る。

- b. #ai-tul-ilan elun-tul-i ha-nun mal-ul cal tut-nun
 子供-PL-TOP 大人-PL-NOM 言ふ-PRES.ADN 言葉-ACC よく聞く-PRES.ADN
 ke+y-a
 の +COP-IFRM
 「子供とは大人の言うことをよく聞くものだ(ぞ)。」

日本語の「ものだ」文との違いは次のような場合にも現れる。

- (28) a. icey ssiweltu-nun ne, choycengwen-i ni son-ulo
 今やシーワールド-TOP お前 チェ・ジョンウォン-NOM お前.GEN 手-INST
 tasi sicakha-nun ke+y-a
 再び始める-PRES.ADN ん +COP-IFRM
 b. 今後、シーワールドグループは、チェ・ジョンウォン、お前の手でやり直すんだ
 〈『オール・イン』 p.484〉 (清水 2015: 41)

ここでは主語が總稱的ではなく、また文が社会通念を表はしてゐるのでもない。決定事項の通達あるいは再確認のために *kesita* 文が使はれたものである。

ここまで見てきた朝鮮語の *kesita* 文の以上の用法は道理や決定事項の教示・通達といふことになりさうである。

過去の *kesita* 文で〈後悔〉のニュアンスを帯びるものがある。(29a, b) がそのような例である。

- (29) a. te ppalli mwulepo-nun ke+y-ess-ta.
 もつと はやく 訊いてみる-PRES.ADN の +COP-PST-DEC
 「もつとはやく訊いてみるのだつた」
 b. te ppalli mwulepo-nun ke+y-ess-e.
 もつと はやく 訊いてみる-PRES.ADN の +COP-PST-IFRM
 「もつとはやく訊いてみるんだつた」

漫画調査票 006-40a-10a1

(29) のやうに〈後悔〉のニュアンスを帯びる過去の *kesita* 文は上に見た〈道理〉の用法と基本的に同じものとみてよい。ここに現れる過去は〈関連づけ〉の過去(金水 2001)、つまり、情報を取得したあとに、その情報が最も關與的であったアクセス時點に基づいて選擇される過去形であり、その道理に氣付くべき時點をすでに逸してしまつてゐることを表現すると言へるからである。同様の解釋は、日本語についてすでに「今になって思い至つた過去の當為を述べるものであり、現実にはそのことを行わなかつたことに対する後悔の念が含意される」と田野村(2002: 123)が指摘してゐる。ただし、ノダ文の表す當為の性質と朝鮮語の *kesita* 文の表す當為の性質が異なることは本節で述べた通りである。

5 眼前提示用法

本稿で *kesita* 文の眼前提示的用法と考へるのは(30)のやうなものである。

(30) *ku cen-ey hwaksil-hi hay cwu-nta kulayss-ketun.*
 その前-に たしか-ADVR する.INF 與へる-PRES.DEC.QUOT さう言ふ-EXPL
kuntey, amwuli kitaly-e=to an hay cwu-nun ke+y-a.
 でも いくら待つ-INF=も NEG する.INF 與へる-PRES.ADN の+COP-IFRM
 「以前たしかにしてくれるつて、さう言つたのよ。でもいくら待つてもしてくれないの」

(30) は、本用言が現在連體形を取つた *kesita* 文である。次の (31) の述部 (31a) のやうに單純な現在形^{*13}や (31b) のやうな回想證據形に、ニュアンスのほとんどを變へることなく置き換へることができる。(31c) のやうな單純過去文にすると事實關係は同じやうに傳はるが、ニュアンスが異なる。

(31) *ku cen-ey hwaksil-hi hay cwu-nta kulayss-ketun.*
 その前-に たしか-ADVR する.INF 與へる-PRES.DEC.QUOT さう言ふ-EXPL
kuntey, amwuli kitaly-e=to an hay
 でも いくら待つ-INF=も NEG する.INF
 { a. *cw-e.* / b. *cwu-te-la(=ko).* / c. *cw-ess-e.* }
 與へる-IFRM 與へる-RETRO-DEC(=QUOT) 與へる-PST-IFRM
 「以前たしかにしてくれるつて、さう言つたのよ。でもいくら待つても a. してくれない/b. くれなかつたなあ/c. くれなかつた」

この節では、上のやうな眼前提示的 *kesita* 文と關連形式について我々の觀察と分析、*kesita* 文の先行研究における扱ひ、歴史的現在の先行研究における扱ひ、日本語の眼前提示的ノダ文の順に見てゆく。

5.1 眼前提示的 *kesita* 文の特徴

單純な現在形や回想證據形にほぼ完全な置き換へが可能な、(30) のやうな現在連體形 *kesita* 文が存在するといふことについては、これまでに指摘がないやうである。このやうな *kesita* 文を眼前提示の *kesita* 文、また (31a) のやうな單純現在を眼前提示的現在と呼ぶこととし、眼前提示の *kesita* 文は一つの *kesita* 文の用法と言へるものと假定して論を進めたい。

まづ、眼前提示的な *kesita* 文や現在に對應する「過去」表現は無標の過去形 (31c) ではなく、(31b) のやうに過去の知覺觀察 (Past Sensory Observation) を表はすとされる (Song 2002) 證據性標識-te-(以下「回想證據」) だと考へられる。眼前提示的 *kesita* 文 (30) や眼前提示的現在文 (31a) は回想證據文 (31b) と同じく非完結相 (imperfective) の表現であるのに對し、過去文 (31c) は完結相の讀みしかない^{*14}。(30, 31a, b) の主節は場を設定するやうな先行文脈がほとんど必須であり、ここで先行する文や從屬節を取り去ると不自然になる。それに

*13 朝鮮語ではこの例に見られるやうに一部の活用においては時制標識の不在が現在時制を示す。

*14 回想證據を非完結相の標識と考へるのはイ＝ヒスン (1957)[筆者未見] 以來の解釋だといふ (Song 2002: 151)。なほ、形態論的には過去形と回想證據はパラダイグマティックな對立をなさないが、この點は話を單純化しておきたい。

對し、(31c)の主節は單文にしても落ち着く表現である。非完結相のアスペクトが背景にはなるが前景になりにくい (Hopper and Thompson 1980) といふ特徴と關係するだらう。

回想證據文について指摘されてきた主語の人稱に關する振る舞ひ (cf. キム=ヨンヒ 1981) も、眼前提示文にもあてはまる。次は回想證據文で一人稱主語が容認されにくいことを示す例である。

(32) a. **nay-ka nam-uy kul-ul hwumchy-e ilk-te-la*
私-NOM 他人-GEN 文章-ACC 盜-INF 讀-RETRO-DEC
(私が他人の文章を盗み讀みしてゐた)

b. *ney-ka nam-uy kul-ul hwumchy-e ilk-te-la*
お前-NOM 他人-GEN 文章-ACC 盜-INF 讀-RETRO-DEC
「お前が他人の文章を盗み讀みしてゐた」*¹⁵

c. *ku-ka nam-uy kul-ul hwumchy-e ilk-te-la*
彼-NOM 他人-GEN 文章-ACC 盜-INF 讀-RETRO-DEC
「彼が他人の文章を盗み讀みしてゐた」

(以上 キム=ヨンヒ 1981: 39 より)

同様に、眼前提示的な *kesita* 文や單純現在文でも一人稱主語が容認されにくい。以下の例では *kesita* 文/單純現在文の順に提示する。

(33) a. [?]*nay-ka nam-uy kul-ul hwumchy-e ilk-nun ke+y-a. / ilk-e.*
私-NOM 他人-GEN 文章-ACC 盜-INF 讀-PRES.ADN の +COP-IFRM 讀-IFRM
(私が他人の文章を盗み讀みしてゐるんだ)

b. *ney-ka nam-uy kul-ul hwumchy-e ilk-nun ke+y-a. / ilk-e.*
お前-NOM 他人-GEN 文章-ACC 盜-INF 讀-PRES.ADN の +COP-IFRM 讀-IFRM
「お前が他人の文章を盗み讀みしてゐるんだ (過去)」

c. *ku-ka nam-uy kul-ul hwumchy-e ilk-nun ke+y-a. / ilk-e.*
彼-NOM 他人-GEN 文章-ACC 盜-INF 讀-PRES.ADN の +COP-IFRM 讀-IFRM
「彼が他人の文章を盗み讀みしてゐるんだ (過去)」

この現象は、正確に言へば、回想證據文や眼前提示文が話し手の觀察を報告してゐることによるものである。そのため、次の (34) のやうに、話し手自身が觀察の對象となるやうな表現の中では、回想證據文でも眼前提示文でも「人稱制約」は解除される (Song 2002: 157)*¹⁶。

*¹⁵ 日本語には回想證據を表す文法範疇がないため「お前が他人の文章を盗み讀みしてゐるんだ/ゐるではないか」と譯するのがニュアンスを生かした翻譯になる。

*¹⁶ (34) の回想證據文の例示は Song (2002: 157) によるが、*kesita* 文と單純現在文は執筆者が追加した。

- (34) a. *cwuwi-lul twullepo-ni na=man socwu-lul i. masi-te-la. / ii. masi-nun*
 周囲-ACC 見回す-SEQ 私=だけ 焼酎-ACC 飲-RETRO-DEC 飲-PRES.ADN
ke+y-a. / iii. masy-e.
 の +COP-IFRM 飲-IFRM
 「周りを見回してみたら私しか焼酎を i. 飲んでみなかった/ii. 飲んでみないんだ/iii. 飲んでみない(ぢやないか)」
- b. *ecey-s-pam kkwum-ey nay-ka kongwen-ul honca i. kenil-te-la. / ii.*
 昨日-CONN-夜 夢-LOC 私-NOM 公園-ACC 一人で 散歩-RETRO-DEC
keni-nun ke+y-a. / iii. kenil-e.
 散歩-PRES.ADN の +COP-IFRM 散歩-IFRM
 「昨晚夢を見たんだけど、自分が公園を一人で i. 散歩してみた/ii. 散歩してゐるんだ/iii. 散歩してゐるぢやないか」

回想證據文を含む發話は、聞き手がゐない状況で使ふことができないといふ指摘がある(ソ=ジョンズ 2006: 329)。眼前提示文にも同じことが言へる。話し手が聞き手に報告する際に使はれる言語形式である點も共通するわけである。

また、回想證據文が發話される場面と、報告内容の場面は同一であつてはならないとも言はれてゐる(ソ=ジョンズ 2006: 328-329)。眼前提示文にも同じことが言へる。§3 で判断の *kesita* 文について論じた際にも目の前の事實を描寫できないといふ特徴に言ひ及んだ。よりひろく *kesita* 文の特徴として全般に現場のことに言及しにくいと言へる可能性もある。

眼前提示的 *kesita* 文や單純現在文は目の前に事態が展開してゐるかのごとくいきいきと情景を提示することが多い。これは時制の標識が現在形を取つてゐることとも關係しよう。実際には目の前にないものをあるかのごとく表現する用法であるから、この例は時制の修辭的利用を行なつてゐるともいへるかもしれない。その他の標識がない單純現在文の場合には特に、時制の修辭的利用は明らかである。このやうな單純現在文は、典型的な歴史的現在(cf. Jespersen 1924)、つまり過去の事態を表す現在文といふことができる。一方で、ここでの *kesita* は眼前提示の標識、對應する回想證據文は、修辭技法によらない、本來の文法形式を伴つて現はれたものだと考へる。

ある種の *kesita* 文のもつ臨場感に關する指摘がなかつたわけではない。金廷珉(2007: 128)は「話し手」の「驚き」、「意外な気持ち」を表す発言を「聞き手」に提示する際「のだ」と「kes-ita」の対応關係が見られた」として次のやうな例を擧げてゐる。

- (35) a. 机で音をたてないな、と思うと、今度は、授業中、立ってるんです。ずーっと!
- b. *Eccay chayksang soli-lul nay-ci anh-nunta siph-ese*
 どうして机 音-ACC 出す-CONN NEG-PRES.DEC 思ふ-INF.EMPH
tolapo-myen, ipen-ey-nun swuep cwung-ey se iss-nun
 振り向く-COND 今度-LOC-TOP 授業 中-LOC 立つ-INF ゐる-PRES.ADN
ke+y-ey=yo! kyeysokhayse!
 ん +COP-IFRM=POL 繼續する-INF.EMPH
 「なぜか机の音をたてないなと思って振り向いて見れば、今度は授業中に立って

いるんです、ずーっと!」

(金廷珉 2007: 128)

同様の例に基づきキム＝ジョンミン (2012) では歴史的現在が典型的にもつ「生き生きとした再現」の表現効果と関連づけ、さらに *kesita* 文が意外性 (mirativity) の標識に近い機能をもつ可能性に言及してゐる。

臨場感そのものではなく、意外性に注目する論者であれば、更に多い。印省熙 (2006: 57) は「話し手にとって特別な出来事と、聞き手に伝える」時、「とりわけ話し手にとって「反期待」「不本意」「不利益」なコトガラ」である場合にノダ文と *kesita* 文の対応の割合が高いとして次のような例を挙げる。

- (36) a. お銚子を運んで来て、廊下の陰に立って、じいって見てんのよ、きらきら目を光らして。あんたああいう目が好きなんでしょう。

〈雪国 131〉

- b. *swulpyeng-ul tul-ko pokto hanphyen-eyse twulheci-key nolyepo-nun*
酒瓶-ACC 持つ-and 廊下 一方-LOC 穴があく-ADVR 睨む-PRES.ADN
ke+y-ey=yo. makwu nwun-ul penttuki-myense, tangsin, ama kule-n
ん +COP-IFRM=POL やたら 目-ACC 光らせる-SIM あなた 多分 そんなだ-PRES.ADN
nwun-ul cohaha-cyo
目-ACC 好く-CONF.POL

〈Selkwuk 95〉 (印省熙 2006: 58–59)

印省熙 (2006: 57) がこの種のものとして挙げる例は、(36) を含め、おほむね本稿でいふ眼前提示的 *kesita* 文にあたる。

また、清水 (2012: 92) も最初に意外な結末を言ふ *kesita* 文として「新事態提示」の *kesita* 文を紹介し「意外や驚きをもって、先に結末となる新事態を提示し、その後の話を展開する」ために *kesita* 文を使用するものだとしてゐる。清水 (2015: 44) は同じ例文について「予想外の驚くべき事態が発生したことを話題のきっかけとして知らせ、その話を続ける際に使われている」としてゐる。挙げられた例は (37) のように、本稿でいふ眼前提示的 *kesita* 文である。

- (37) a. ドアを開けると、知らない人が立っているんですよ*17。それで...

- b. *mwun-ul yel-ess-te-ni, molu-nun salam-i se iss-nun*
扉-ACC 開-PST-RETRO-SEQ 不知-PRES.ADN 人-NOM 立-INF ゐる-PRES.ADN
ke+y-ey=yo. kulay-se . . .
の-COP-IFRM=POL さうだ-INF-EMPH

(清水 2015: 44)

これらの指摘は、本稿が眼前提示的 *kesita* 文と呼ぶ用法に注目してゐる点でたいへん重

*17 日本語の対応文は清水 (2015: 44) では「立っているんですよ」、清水 (2012: 93) では述語を「立っていたんですよ」としてゐる。

要だが、過去のできごとに現在連體形が使はれてゐることに注目してゐるのはキム＝ジョンミン (2012) だけのやうである。また、單純現在文や回想證據文に置き換へが可能であり、話し手の觀察の報告としての特徴をもつことには言及してゐない。單純現在と *kesita* 文といふ二種類の眼前提示文の臨場感については §6 で改めて論じることとし、この小節で示したことをまとめたい。眼前提示的 *kesita* 文、眼前提示的現在文、回想證據文の共通點は次の通りである。

- (38) a. 非完結相の讀みをもつ
 b. 通常は場を設定する先行文脈が存在する
 c. 話し手の觀察を内容とする
 d. 發話の聞き手が必要 (報告)
 e. 發話の場と報告される場は必ず異なる

三つの異なる形式をまとめて「觀察報告文」と呼ぶこともできるだらう。

回想證據文と眼前提示文 (*kesita* 文と現在文) の違ひは、前者は話し手が出來事を想ひ浮かべてゐるものとして表現するのに對し、後者は話し手がその出來事を目の前に展開してゐるものとして提示することである。

5.2 朝鮮語の歴史的現在

朝鮮語の單純現在文に歴史的現在の用法があることについては、これまで若干の指摘があつたやうである。しかし、過去の出來事を表す、性質の異なる單純現在文を、全て一括りにする傾向があり、觀察報告文としての特徴や *kesita* 文や回想證據文との置き換へ可能性についての指摘はなかつたのではないか。例へばムン＝スギョン (2011: 161) が取り上げる「歴史的現在」の用法は (39a) と (39c) である。

(39) *kesil-eyse isangha-n soli-ka tully-ess-e=yo.*

居室-で へん-PRES.ADN 音-NOM 聞こえる-PST-IFRM=POL

cheum-ey-n calmos tul-ess-na siph-ess-ciman kulayto kyeysook soli-ka

初め-に-TOP 間違へて聞く-PST-FAM.INT 思ふ-PST-ADRVS それでも引き續き音-NOM
nass-e=yo. kulayse nakass-ci.

する.PST-IFRM=POL それで 出て行く-CONF

kulentey, (a.)sopha twi-ey mwenka kemwusulumha-n key iss-e

ところが ソファ-後ろ-LOC 何か 黒つぽい-PRES.ADN もの.NOM ある-INF
poy-e.

見える-IFRM

(b.)*kulayse palkkwumchi-lul tul-ko kel-ess-e=yo. mwusep-te-la.*

それで かかと-ACC 上げる-and 歩く-PST-IFRM=POL 怖い-RETRO-DEC

(c.)*na-eykey kongkyek-ul hwitwul-umyen ecce-ci.*

私-DAT 攻撃-ACC 振り回す-COND どうする-CONF

「居室でへんな音が聞こえました。初めは聞き間違へたのかと思ひましたが、でも音

がずつとしました。それで外に出た。ところが、(a.) ソファの後ろになにか黒っぽいものがあるやうにみえる。(b.) それで爪先立ちで(かかとを上げて)歩きました。怖かった。(c.) 私に攻撃をしかけてきたらどうしよう...」*18

(ムン＝スギョン 2011: 161、譯は引用者による直譯調)

(39a) は本稿で言ふ眼前提示的な單純現在文である。一方で、(39c) は引用節を導入する上位の節が取り拂はれて引用内容を表す節のみが獨立の文として提示された、自由話法/獨立引用節といふべきものである。ここでは發話ではなく思考内容を提示するタイプの自由話法が用ゐられてゐる。自由話法は現在形の眼前提示用法とは異なる性格をもつてゐる。獨立引用節は現在形に限られないし、眼前提示的現在文に對する回想證據文のやうな、對應する「本來の」文法範疇ももたない。また、文タイプもさまざまなのが許される。

5.3 日本語における眼前提示的ノダ文

朝鮮語の眼前提示的 *kesita* 文と同様の効果をもつノダ文が、日本語にもある。管見の限り、このことはノダ文の研究の中で取り上げられることはなく、「歴史的現在」の例として何度か言及されたことがあるだけのやうである。例へば工藤 (1993)、松村 (1997)、伴 (2000) が「歴史的現在」として例示するものに、多くの眼前提示的ノダ文が入つてゐる。また、角田 (2004: 50) は、過去の事態を表はす節であつても「なんと」、「～ではないか」などの驚きを表はす文の中で現在形が用ゐられることが多いと指摘してゐる。次は工藤 (1993) の擧げる例である。

(40) この間もその父が手紙を寄来して、お前が赤になるとおれは割腹しなければならん
なんておどかして来るの。私は自分も生命がけですから、お父さんの生命のことまで
考えていられませんで返事してやったわ」 〈朱を奪うもの〉 (工藤 1993: 42)

(40) のやうに、工藤が取り上げる用例の多くはノダ文である。このやうなノダ文を工藤は「話し手の感情・評価性の説明としてはたらくノダ文」(p.46)として、本稿で見てきた朝鮮語の眼前提示的 *kesita* 文と同様の特徴を觀察してゐる。すなはち、「過去を指示する絶対的(ダイクティックな)時間副詞、あるいは時間状況語(文)との共起」(p.42)、「話し手のその過去の出来事に対する感情・評価的態度とのむすびつき」(p.43)「話し手自身が直接体験(知覚)した出来事である場合が基本的」(p.47)といったことが「歴史的現在」の特徴だとし、「これは、過去の出来事の記憶の生々しさ=發話時における過去の出来事の心理的現存性を表現する」(p.48)ものだとしてゐる。ここに示された特徴は朝鮮語の眼前提示的 *kesita* 文にも見られるものばかりである。なほ、工藤 (1993) はノダ以外にジャナイ(カ)が付加されることがあることにも言及してゐる。

日本語の眼前提示的ノダ文における人稱制限については、松村 (1997)、伴 (2000)、小玉 (2011) などが指摘してゐる。

*18 譯文は直譯調にするため日本語の「のだ」を故意に避けた。また原文の番號をローマ字に改め、示されてゐなかつた(c)を補つた。

- (41) 山川: そしたら会社の方に電話がかかってきて、
「舟村先生の電話番号を調べろ」って a.{ 言う/言った } んですよ。
黒柳: お兄さまが。
山川: 「どうしたんだ。」「とにかく調べろ。」
で、とにかく電話番号教えて、
で、今度は「舟村先生どこにいるか調べろ」って b.{ 言う/言った } んですよ。
「そんなもん知らない」って c.{ 言った/#言う } んですよ。
黒柳: そんな偉い方ね。
山川: 当時は雲のうえの人のようなものですよ。
そいでまあ、一応調べて、...

〈テレビ朝日「徹子の部屋」〉(松村 1997: 123-124)

三人称主語をもつ (41a, b) が実際に現在形で現れた部分で、過去形に置き換えることができるのに對し、一人称主語をもつ (41c) は実際に過去形で現れた部分で、現在形に置き換えることができないといふ。このことを松村 (1997: 129) は「日本語の歴史的現在、このように話し手自身の心の内にカメラを置いて描写を行うという視点をもつ」と説明してゐる。

ただし、このやうな人稱制限は、朝鮮語の觀察報告文におけるものと同様、やはり絶対的なものではない。次は (34) の日本語譯文の眼前提示文の再掲である。

- (42) a. 「周りを見回してみたら私しか焼酎を飲んでゐないんだ/飲んでゐないぢやないか」
b. 「昨晚夢を見たんだけど、自分が公園を一人で散歩してゐるんだ/ゐるぢやないか」

以上に明らかなやうに、日本語にも朝鮮語と基本的に同じ性質をもつ觀察報告文があり、「のだ」あるいは「ではないか」で標示されるといふことができる。

6 眼前提示の實演的性質について

この節では我々が「眼前提示」と呼んできたものの言語表現としてのタイプは「實演」であることを論じる。Jespersen (1924: 290) は早くに直接話法と歴史的現在の臨場感が同質のものであることを指摘した。我々の見方もこれに非常に近い。ただし、直接話法が發話目的としても表現効果としても必ずしも臨場感をもたない (cf. 井上 1999) のと同様、歴史的現在も臨場感自體がその本質とは言へないし、逆に間接話法が臨場感をもつてゐないとも言へないことに注意したい。本稿で見えてきた眼前提示文はどれも、必ず臨場感を持たなければならないといふわけではない。一般に臨場感の程度は演出により調節可能である。直接話法や歴史的現在のもつ臨場感は、これらの表現が實演的側面 (Clark and Gerrig 1990)、つまりアイコン記號 (類似記號) 的側面をもつてゐることに由來するものだと考へる。

直接引用が實演であることは分かりやすい。直接引用が、話されたことば、話されることばを忠實に實演してゐるものとして提示され、受け止められるのは明らかである。實演においては、描寫の對象は、取り巻く場ごと發話の場に展開されてしまふ。實演の最中、

話し手は場に臨んでゐるものとして直示表現を使ひ、また聞き手をもその場に臨ませるものである。すでに場に臨んでゐるからこそ、その感じ(臨場感)を調整することが可能になるのである。

間接引用も(言語、表現によりさまざまだが) 實演的側面を相當に残してゐることが多い。直接引用と間接引用を二つの全く異なるものと考えず、引用の「間接性」の度合ひ(cf. 鎌田 2000; Tida 2006a)が相対的なものだと捉へる議論では「間接化」が不完全に行はれた例がしばしば挙げられてをり、間接引用内の「直接引用的」要素について具體的に言及してゐる。一方で、話法を一つの文法範疇として扱ひ、直接話法と間接話法を對立するメンバーと認める藤田(2000)も、日本語の間接引用について、直接話法に對し「写像の軸がずれたヴァリエーション」と見ることができ、三次元の立體を二次元の平面に寫しとつた圖面がアイコン記號であるのと同様に、間接話法の形もアイコン記號だと言ふ(pp.181-182)。間接引用の實演性が、立場に拘はらず指摘されてゐると言つて良いのではなからうか。

オノマトペ(擬音・擬態語)が臨場感をもつといふ指摘はDoke(1935)のオノマトペ(彼の ideophones)の定義にまで遡り、また繰り返し指摘されてきたが(cf. Diffloth 1972; 定延 2015)、本當にオノマトペに内在する性質といふことができるだらうか。オノマトペがいきいきしてゐるやうに感じられるのは、典型的なオノマトペが、言語的な實演の道具として使はれるからではないだらうか(cf. Dingemanse 2011)。實演は基本的に假のもの(例へばオノマトペのやうな言語形式)を一旦本物(例へばオノマトペに對應する出來事や様態)と見立てて行なはれる。落語家の扇子と同じで、客觀的に見て類似性が必ずしも高くはないものを使ひ、約束として見立てる場合も多い。そして、扇子自體にはもちろん臨場感は備はつてゐない。擬態語は基本的にそのやうな、慣習的に實演に供せられるものだと考へられる。實演の用に立つことがオノマトペの主たる任務だとする考へ方を取ると、實演的一語文として用ゐられるのが本來的な用法(あるいは望ましい定義)だといふことになりさうである。定延(2015)がオノマトペが遂行的特質をもつとして、「文外獨立用法」がオノマトペの最も典型的な使ひ方であるといふのは、同じ立場からの發言だと考へられる。定延はオノマトペ發話によつて遂行される行爲の種類について明確にしてゐないが、それは實演といふ行爲になるのではないだらうか。

引用でない文において、直示形式が實演的に用ゐられることがある。ドム語の指示詞を取り上げたい。Tida(2006a: 239)はドム語において動詞に後置された指示詞が生き生きとした描寫の中で話者の興奮を表現する、「非直示的」な用法をもつとして次のやうな例を舉げてゐる。

- (43) ɾer ɲime ɲe-ipka ɲime
to down.there go-2/3DL.SRD down.there
「二人は下の方に(流されて)行つた」*19

*19 この例では同じ指示詞 *ɲime* が二度現れてをり分かりにくいだが、初めのは「下る」方向の移動であることを示し、非直示的に使はれてゐる。二番目のものが問題となる實演的指示詞である。Tida(2006b,a)は動詞に後置される場合の特殊な用法であるやうに記述してゐるが、語りの地の文に現れる指示詞の多くが實演的だと言へる可能性がある。

つた。

最後に、本稿では問題を切り分ける形で現象を観察し、*kesita* 文の用法を統一的に説明することは試みなかつた。*kesita* 文は全般に、目の前の事態に言及する時に使ひにくいといふことができるのなら、*kesita* 文の統一的な説明に關する事實になるかもしれない。

略號

ACC	accusative 對格	EXPL	explicative 説明	POL	polite 丁寧
ADN	adnominal 連體	FAM	familiar style 等稱體	PRES	present 現在
ADVR	adverbializer 副詞化	HORT	hortative 勸誘	PROSP	prospective 將然
ADVRS	adversative 逆接	IFRM	informal 非格式	PST	past 過去
COND	conditional 條件	INCH	inchoative 起動	Q	question 疑問
CONF	confirmative 確認	INF	infinitive 連用	RETRO	retrospective 回想
CONN	connective 連結形態	INST	instrumental 道具	SEQ	sequential 繼起
DEC	declarative 平叙	INT	interrogative 疑問	SIM	simultaneous 同時
EMPH	emphatic 強調	LOC	locative 場所格	TOP	topic 主題
EXCL	exclamation 感嘆	NOM	nominative 主格		
		PL	plural 複數		

参考文献

- Bak, S. Y. (1983) *Kes kath-ta* construction and subjectlessness in Korean. *Korean linguistics : journal of the International Circle of Korean Linguistics* 3, 7–20.
- Clark, Herbert H. and Richard J. Gerrig (1990) Quotations as demonstrations. *Language* 66(4), 764–805.
- Diffloth, Gérard (1972) Notes on expressive meaning. *Chicago Linguistic Society* 8, 440–447.
- Dingemans, Mark (2011) The meaning and use of ideophones in Siwu. Ph.D. dissertation, Radboud University, URL: <http://thesis.ideophone.org/>.
- Doke, Clement Martyn (1935) *Bantu Linguistic Terminology*, London: Longmans, Green, and Co.
- Hopper, Paul J and Sandra A Thompson (1980) Transitivity in grammar and discourse. *Language*, 251–299.
- Jespersen, Otto (1924) *The philosophy of grammar*, Unwin Brothers, (安藤貞雄訳, 『文法の原理(上・中・下)』, 岩波書店, 2006年), (reprinted in 1963).
- Kim, Joungmin (2013) Mermaid construction in Korean. In Tsunoda, Tasaku ed. *Adnominal clauses and the ‘Mermaid Construction’: grammaticalisation of nouns*. National Institute for Japanese Language and Linguistics.
- Song, Jae-Mog (2002) A typological analysis of the Korean evidential marker ‘-te-’. *Eoneohag* 32, 147–164.

- Tida, Syuntarô (2006a) A grammar of the dom language. Ph.D. dissertation, Kyoto University.
- (2006b) 「Demonstratives in Dom」, 『庄垣内正弘先生退任記念論集』, 123-144. 京都大学言語学研究室.
- Tsunoda, Mie (2017) 「Data Elicitation Using Mangas : The “Cogitation Process” Approach」, 『アジア・アフリカ言語文化研究 (Journal of Asian and African Studies)』, 94, 179-209.
- アン=ジュホ 안주호 (1997) 『한국어 명사의 문법화 현상 연구』, 한국문화사, 316, (韓國語の名詞の文法化現象研究).
- 安増煥 アン=ジュンファン (1992) 「日本語形式名詞「ノ」の統辭意味」, 『日本學報』, 28, 85-110, (日本語の形式名詞「ノ」の統語意味).
- 李南姬 이=ナムヒ (2004) 「문말표현「의다」와「것이다」의 대조고찰 - 「의다」에 대응하는 한국어의 다양한 형식들」, 『日本言語文化』, 5, 63-83, (文末表現「의다」と「kesita」の對照考察- 「의다」に對應する韓國語の多様な諸形式).
- 이=히스 이희승 (1957) 『새 고등문법』, 일조각, (新高等文法).
- 井上令子 (1999) 「直接話法 - 演技タイプと証明タイプ」, 『信愛紀要』, 39, 17-26.
- 印省熙 인=ソンヒ (2006) 「日本語の「의다」と韓國語の「-ㄴ것이다」」, 『朝鮮語研究』, 3, 51-94. くろしお出版.
- 奥田靖雄 (1990) 「説明(その1)-의다, 의である, 의です-」, 言語学研究会 (編) 『言語学研究会の論文集・その4 ことばの科学4』, 173-216. むぎ書房.
- 鎌田修 (2000) 『日本語の引用』, ひつじ書房, iii + 199.
- カン=ソヨン 강소영 (2004) 『명사구 보문 구성의 문법화』, 한국문화사, viii + 210, (名詞句補文構成の文法化).
- キム=オンジュ 김언주 (1996) 「‘것’의 분포와 기능 - 통시적 고찰을 중심으로 -」, 『우리말 연구』, 6, 179-216, (「kes」の分布と機能- 通時的考察を中心に-).
- 金廷珉 김=ジョン민 (2007) 「日本語の「의다」と韓國語の「KES-ITA」の意味に関する対照研究」, 『東北大学高等教育開発推進センター紀要』, 2, 123-133.
- キム=ジョン민 김정민 (2012) 「한일 문말형식의 증거성과 의외성 기능 - ‘것이다’와 ‘의다’를 중심으로」, 『인문연구』, 66, 27-48, (金廷珉、韓日文末形式の證據性と意外性機能- 「kesita」と「의다」を中心に).
- 金善美 김=ソンミ (2016) 「韓國語の「-ㄴ것-」と「-을 것이-」の出現を決定する情報の登録領域について: 直示性の観点から」, 『ありあけ』, 15, 41-58.
- キム=ソンミ・たくぼ=ゆきのり・チョン=ソンヨ・ちだ=しゅんたろう 김선미・다쿠보 유키노리・정성여・치다 순타로 (2008) 「‘을 것’이 나타내는 추측의 성질에 대하여-의문문의 제약의 관점에서」, 『2008년도 한국언어학회 동계 학술대회 자료집』, 91-101. 사단법인 한국언어학회, (金善美・田窪行則・鄭聖汝・千田俊太郎、‘UI kes’が表す推測の性質について - 疑問文の制約の観点から).
- キム=ヨンヒ 김영희 (1981) 「회상문의 인칭제약과 책임성」, 『국어학』, 10, 37-80, (回想文の人稱制約と責任性).
- 金水敏 (2001) 「テンスと情報」, 音声文法研究会 (編) 『文法と音声 III』, 55-79. くろしお出版.

- 工藤真由美 (1993) 「過去の出来事の表現 その 2 – 会話文における歴史的現在用法を中心に–」, 『日本語とアジア諸言語との対照的研究 – テンスとアスペクト–』, 39–52. (1991–1992 年度科学研究費報告書, 研究代表者: 鈴木重幸).
- 小玉安恵 (2011) 「体験談における歴史的現在形の機能と視点」, 『日本語教育』, 148, 114–128.
- 定延利之 (2015) 「遂行的特質に基づく日本語オノマトペの利活用」, 『人工知能学会論文誌』, 30 (1), 353–363.
- 清水孝司 (2012) 「日本語の「のだ」と韓国語の「kes-i-ta」の対照研究: 状況との関連づけの有無がもたらす表現の差」, 『言語文化科学研究 (言語情報編)』, 7, 63–96.
- (2015) 「韓国語の「-ㄴ것이다 (-n kesita)」と日本語の「のだ」の会話文における対応関係 – 情報の書き換えの原理からの説明 –」, 『朝鮮語教育 – 理論と実践–』, 10, 32–59.
- シン=ソンギョン 신선경 (1993) 「‘것이다’ 구문에 관하여」, 『국어학』, 23, 119–158, (‘kesita’ 構文について).
- 新屋映子 (1989) 「“文末名詞”について」, 『国語学』, 159, (1)–(14).
- ソ=ジョン스 서정수 (1978) 「‘ㄴ 것’ 에 관하여 – ‘겠’ 과의 대비를 중심으로 –」, 『국어학』, 6, 85–110, (‘1kes’ について – ‘keyss’ との対比を中心に –).
- (2006) 『국어문법 (수정판)』, 집문당, 서울, xv + 1568, (『國語文法 (修正版)』、初版は 1994 年).
- 宋承姬 ソン=スンヒ (1993) 「「のだ」と韓国語の「-kesita」の対照研究」, 『中国四国教育学会教育学研究紀要』, 39 (2), 395–399.
- 高梨信乃 (2006) 「助動詞「ものだ」「ことだ」: 評価のモダリティを表す用法」, 『神戸大学留学生センター紀要』, 12, 1–23.
- (2010) 『評価のモダリティ現代日本語における記述的研究』, くろしお出版, vi + 249.
- 田中望 (1979) 「日常言語における“説明”について」, 『日本語と日本語教育』, 8, 49–64, (慶應義塾大学国際センター).
- 田野村忠温 (2002) 『現代日本語の文法 I 「のだ」の意味と用法』, 和泉書院, 再刊, 244.
- 崔真姬 チェ=ジンヒ (2005) 「「のだ」と「것이다 geosida」の使用条件の異同」, 『人間文化 : humanities and sciences : H & S』, 20, 51–59.
- 丁仁京 チョン=インギョン (2008) 「韓国語の「것이다/geosida」に由来する諸形式の総合的研究」, 『言語と文明』, 6, 137–162.
- チョン=サン Chol 정상철 (2016) 「〈~ㄴ 것이다〉의 텍스트 기능과 의미」, 『텍스트언어학』, 41, 245–267, (〈~n kesita〉のテキスト機能と意味).
- 角田太作 (1996) 「体言締め文」, 鈴木泰・角田太作 (編) 『日本語文法の諸問題』, 139–161. ひつじ書房.
- (2011) 「人魚構文: 日本語学から一般言語学への貢献」, 『国立国語研究所論集』, 1, 53–75, DOI : <http://doi.org/10.15084/00000476>.
- 角田三枝 (2004) 『日本語の節・文の接続とモダリティ』, くろしお出版, v + 225.
- 野田春美 (1997) 『「の (だ)」の機能』, くろしお出版, 273.

- 野間秀樹 (1990) 「〈할것이다〉の研究――再び現代朝鮮語の用言の mood 形式をめぐって」, 『朝鮮学報』, 134, 1-64.
- 伴映恵子 (2000) 「日本語における「時制交替」論の問題」, 『ことばの科学』, 13, 25-40.
- パク=ソヨン 박소영 (2001) 「‘-은 것이다’ 구성의 텍스트 분석」, 外 (編) 『한국 텍스트과 학의 제과제』, 135-158. 역락, 서울, (朴素英 「‘-un kesita’ 構成のテキスト分析」).
- パク=ナリ 박나리 (2012) 「‘-는 것이다’ 구문 연구 - 문법기능과 담화기능 그리고 화자의 담화전략의 상관성을 중심으로」, 『국어학』, 65, 251-279, (「-nun kesita」 構文研究 - 文法機能と談話機能そして話者の談話戦略の相關性を中心に).
- 藤田保幸 (2000) 『国語引用構文の研究』, 和泉書院, vii + 660.
- 益岡隆志 (2007) 『日本語モダリティ探究』, くろしお出版, iv + 309.
- 松村瑞子 (1997) 「日本語の歴史的現在と主語の人称」, 『言語科学』, 32, 123-132, (九州大学言語文化部言語研究会).
- ムン=스ギョン 문숙영 (2011) 「접속문의 시제 현상과 상대시제」, 『한국어학』, 50, 141-172, (接續文の時制現象と相對時制).

(ちだしゅんたらう、京都大學大學院文學研究科・きむそんみ、天理大學國際學部)